



サザエさんの家から 学ぶ日本家屋

研究動機

自由研究で建築関係のことをしたいと思っていたときに、アニメなどの創作物の中の建築を調べてみるのが面白いのではないかと考えました。何を調べようかと考えていたときに、サザエさんの家が一般的な日本家屋だということを知り、このことを調べてみたら面白いと考え、このテーマを選びました。

研究内容

サザエさんの家を調べ、どのようなところが日本家屋と呼ばれる理由なのか、日本家屋はなぜそのような形になったのかを調べました。

そして、今の家と比較をしてみました。



日本家屋とは？

日本家屋というのは、日本特有の自然素材を使い、伝統的な建築方法でつくられた、伝統的な日本の家のことを指します。使われる材料もスタイルも洋風のものと異なり、日本の気候と相性の良い建物となっています。

しかし、近年の新築の戸建て住宅の多くは洋風のデザインで、昔ながらの日本家屋の新築の家は残念ながらあまり見られなくなっていました。



サザエさんとは？

アニメーションの原作である漫画「サザエさん」は、昭和21年に九州の「夕刊フクニチ」という新聞に連載されたのがはじまりです。

作者の長谷川町子さんが、仕事を依頼されてから、どんな内容にするか、妹さんと一緒に毎日海岸を散歩しながら考えていたので、登場人物が、みな海産物の名前になったそうです。

そして、昭和24年から49年まで、サザエさん一家は、東京の朝日新聞に連載されました。

アニメ「サザエさん」は、昭和44年(1969年)10月15日、フジテレビで第1回が放送されたのがはじまりです。

サザエさん一家が繰り広げるほのぼのとしたストーリーは、この2021年まで、ずっと「よい家族の代表」として、多くの人から愛され、親しまれています。



サザエさんの家の基本情報

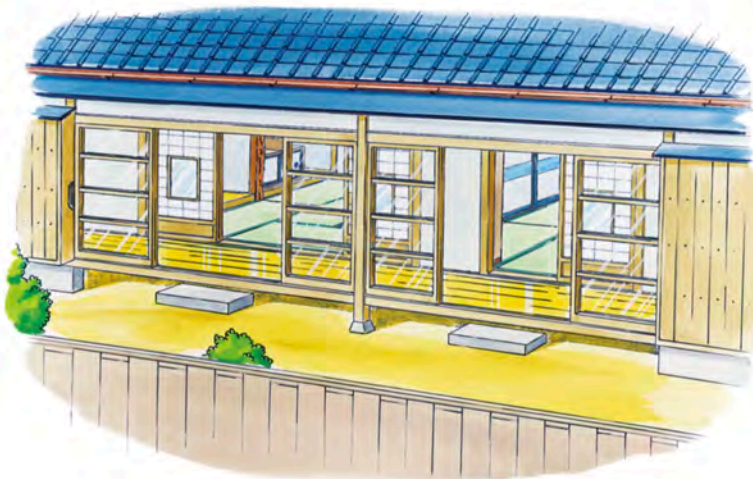
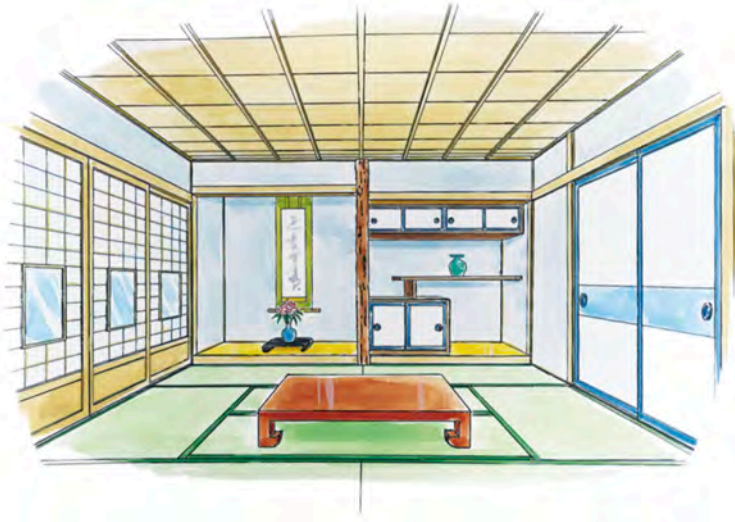
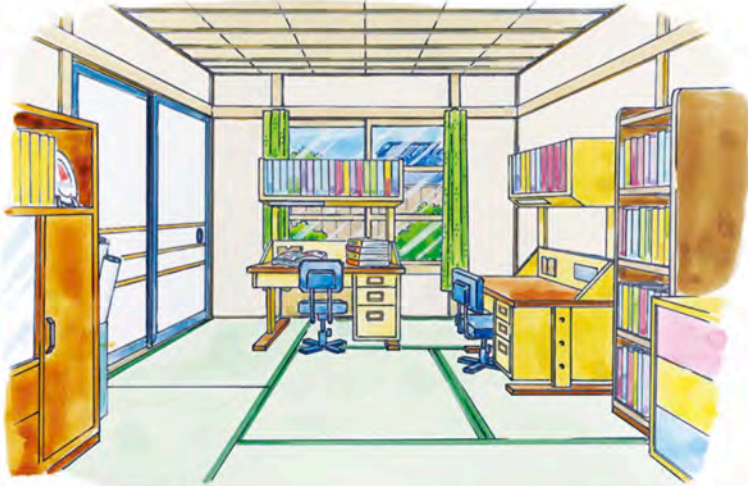
場所は東京都世田谷区桜新町

間取りは5DK

在来工法の木造平屋建て

波平・フネ・カツオ・ワカメ・マスオ・サザエ・
タラオの7人で住んでいる





サザエさん家からみる日本家屋の特徴

・木造建築

サザエさんの家は、住宅の主要な部分に木材を使用して建てられた、木造建築です。木材は日本家屋には欠かせない素材で、柱や床などに使われます。木材でつくられた家の耐久性は高く、100年を超えてもきれいな状態で残っている木造建築はたくさんあります。

このように、日本の気候に適した天然素材が使われているのも、日本家屋の特徴です。

昔ながらの日本家屋は、建材が木材の他に土、漆喰などの自然でできた素材であり、合板やビニール製のものなどに比べて調湿機能が高いものが多く使われているため、「家が呼吸する」かのように良い空気や湿度が自然に保たれるようになっています。



・瓦屋根

瓦は、粘土を高温で焼き固めた建築材料のことで、日本家屋の美しさをあらわすものでもあります。

瓦は断熱性、防音性、防火性が高い、通気性が良いなどとして知られ、耐用年数も50～100年と、頑丈な素材です。日本家屋の耐久性の高さを保ってきたものだともいえます。耐水性も強いいため、雨漏りがしにくく、雨の多い日本には適している素材とも言えるでしょう。

また、汚れにも強く、美しい外観を長年維持します。

ちなみに、サザエさんの家の屋根に用いられている瓦は、J型(和型)と呼ばれる形のものです、古い家屋でよく見られる形です。波型の形が美しく、雨が降った時の水切れも良い形です。



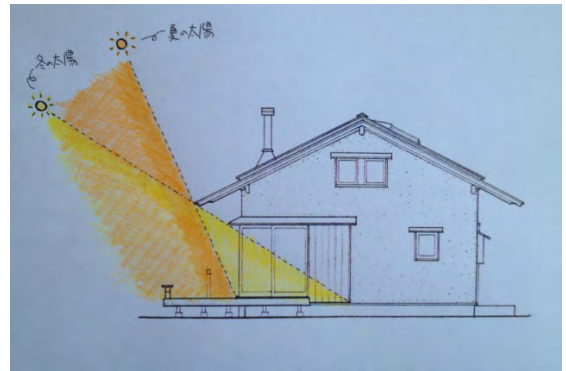
・ 軒

軒とは、屋根の一部が壁よりも外側にせり出したもののことを言い、サザエさんの家にも見られます。

太陽が高い位置に登る夏場は日光が部屋に入るのを防ぎ、低い位置に登る冬場は日光を取り入れるというような、季節に応じて光の量を調整する機能があります。

また、梅雨や台風などの雨が多いときでも、軒先があることで窓を開けることができ、壁やサッシが傷つくのを防ぎます。

大きな軒をつけるとその分建物本体の建築面積が制限されてしまうため、現代の土地の狭い都心部では軒のない家が多くなってしまいました。



・ 門や塀で囲まれている

日本では一般的に、住宅地の道路に歩道はないため、道路などの公共のスペースと私有地との境目として門やフェンスが設けられています。

そして、隣家との境界をつくり、プライバシーを守るのが、敷地の境界にめぐらせた塀や壁です。

サザエさんの家は、コンクリートブロックのようなものでつくられた塀で家が囲まれています。

アメリカの一戸建ての家などには、門や塀が存在しない家が多いです。



・ 玄関

玄関は一般的に、段差があり、そこで靴を脱ぎ、家に入るための場所です。日本の家には当たり前のようにある玄関ですが、海外では「玄関」という概念がないという国もあり、ドアを開けたらいきなりリビングにつながっている、ということもあるようです。

玄関の段差ができたのは、日本の環境が原因とも言われています。日本は高温多湿な国のため、家は床を上げて湿気が抜けやすい構造にしておかないと、カビが発生したり、柱や床板などが傷みやすくなったりしてしまいます。また、大雨が降って浸水したときに家の中まで水が入らないようにという意味でも床をあげる構造となりました。

そして、玄関で靴を脱ぐというのも、日本の気候が関係しています。先程も書いたように日本は高温多湿な国です。そのため、靴を履いたまま家に上がると畳や床が傷んでしまいます。そして日本では、床にお膳を敷いて食事をしたり、布団を敷いて寝たりしていたので、その床を綺麗にしておくためという理由もあります。欧米では床に直接座るといような文化はありません。

また、家の中は一段高く、大切な場所だと考えられていたため、その場所土足で上り込むのは失礼にあたるという考え方もあったようです。

玄関には脇に床の間と呼ばれる小さな引込んだスペースを設けることもあり、サザエさんの家ではそのスペースに花が飾られています。



・ 玄関土間

玄関土間とは、玄関が土間(床材を貼らない床)になっているもののことです。

古い家には、室内と屋外をつなぐ空間として、玄関土間が設けられていました。

玄関土間をつくり、玄関を広くすることによって、近所の人々や訪ねてきた人を、家にあげなくとも、簡単な応接ができます。家の中でも外でもない曖昧な位置付けの土間の存在は、かつては社交の場でした。

昔の土間は、水仕事や炊事、農作業をしたり、それらの道具を置いたりする場所でした。

現代の土間は自転車やベビーカー、アウトドア用品、趣味のものを置く場として利用することができます。



・引き戸

サザエさんの家の玄関、そして縁側の扉は、引き戸となっています。

引き戸は日本独特の文化といえます。

引き戸が日本で生まれて定着したのは、日本の高温多湿な環境が関係していると考えられます。

引き戸はドアのように開けるスペースが必要なく、ドアとは違って空間の仕切り(壁)の役目も果たします。仕切りを開ければ、小さい部屋が広い部屋に変わって、風通しも良くなります。そのため、日本の高温多湿な環境に合っているとして定着していきました。

また。日本家屋は木造建築であることが多いため。軽い素材で引き戸が作れたのも引き戸が定着した理由の一つとなります。

日本とは違い、異民族や宗教などによる争いが多かった外国では、防犯上弱い引き戸は使われず、1辺を金具で固定するため攻撃に強く安全な構造の開き戸が使われていました。



・ 格子戸

格子戸というのは、日本家屋の玄関によく見られる格子状の扉のことをいいます。

格子の縦方向の木のことを豎子(たてこ)、横方向の木のことを貫(ぬき)と呼びます。

この格子は適度に視線を遮り、直射日光を遮って柔らかい自然光を取り込むことができます。視線を遮りながらも、音や気配が伝わる日本らしさが特徴的です。

また、格子戸は通気性が良いのも特徴で、扉などに比べて閉塞感を感じにくいです。

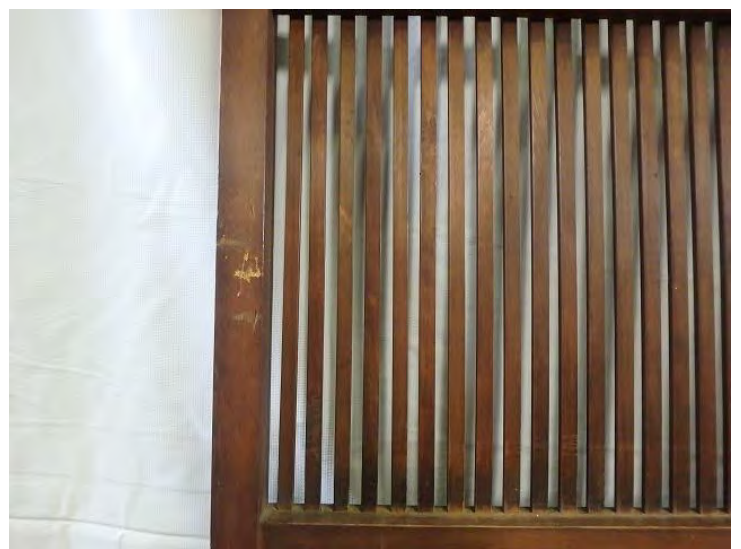
また、格子戸は外から中が見えにくく、中から外が見えやすいというブラインドのような機能を果たし、防犯にも役立ちます。

格子の始まりは、飛鳥時代に、大陸より寺院建築が伝来したとき、その窓の意匠として用いられたことだと言われています。

平安時代の後期からはめ殺し(壁などに直接はめ込まれた開閉できないもの)が多く使われるようになり、鎌倉時代になると禅師を中心に格子戸が普及しました。

当時に格子は、縦横に組まれただけの粗い単純なものばかりでしたが、室町時代の末から安土桃山時代にかけて工具が発達したころにより、美しく作り上げることが可能になって、繊細な格子ができるようになったそうです。

江戸時代には、庶民の家にも玄関の格子戸や窓の目隠しのための格子が普及してゆき、色々な地方に独特の格子の組み方やデザインが生まれました。



・ふすま

ふすまは、部屋を仕切る引き戸の役割を持つもので、サザエさんの家にも多く用いられています。

ふすまは開き具合によって、日差しや風、外の気配を調整することができます。

ふすまの表面には「表紙」といわれる和紙が貼られています。これを通すと光が柔らかくなり、夏の強い日差しもやさしい印象に変えます。また、調湿性にも優れています。

この表紙にはさまざまなデザインがあるため、好みに応じて変えることができます。ふすまはドアよりも簡単に外すことができます。そのため、必要なときだけ広い空間をつくることに役立ちます。

昔は自宅に親戚や近所の人々を招き催事を行うことが多くありました。そのため、ふすまを取り外すことによって部屋の大きさを変えていました。



・障子

障子もふすまと同じく引き戸の一種です。

障子には、「障子紙」というものが用いられています。

カーテンは閉めると部屋が暗くなってしましますが、障子は閉めると強い日差しがちょうど良い強さにやわらいでくれるため、一定の明るさを保つことができます。

障子も取り外すことができ、間取りを変えることが簡単にできるため、ふすまと同じように隣り合う部屋をつなぎ合わせて大部屋として使うことができます。



・田の字型

「田の字型」の間取りは、日本家屋によく見られる間取りで、サザエさんの家にも用いられています。

「田の字型」とは、四つの部屋が「田」の字になるように並んでいる間取りのことを指します。

部屋の間はふすまで仕切られているため、二個の部屋をつなげたり、全ての部屋を一つの間として使うこともできます。

また、部屋が連続していることで、奥行きが生まれ、実際の部屋の大きさよりも広々と感じられます。

どの部屋も外と面しているため、採光や通気性もよく、部屋全体が明るくなります。

田の字型の間取りは、プライベート空間も維持しつつ、個室と違って、ふすまの奥から人の気配を感じられるというような、人と人のつながりを支える間取りになっています。



・ 畳

畳は、い草というものを織ってつくられた、日本固有の敷物です。サザエさんの家の部屋のほとんどに使われています。

存在する最も古い畳は、奈良時代のものです。そのころはござのような使い方をしていたそうです。

その次の平安時代の畳は、権力をかたちどるものでした。今のように敷き詰められたようなものではなく、必要な場所にだけ畳を置いていました。住まいが寝殿造(平安時代に完成した貴族住宅の様式のこと)になると、今の座布団の代わりに、敷いたり寝具として家の中のあちこちに畳が置かれました。

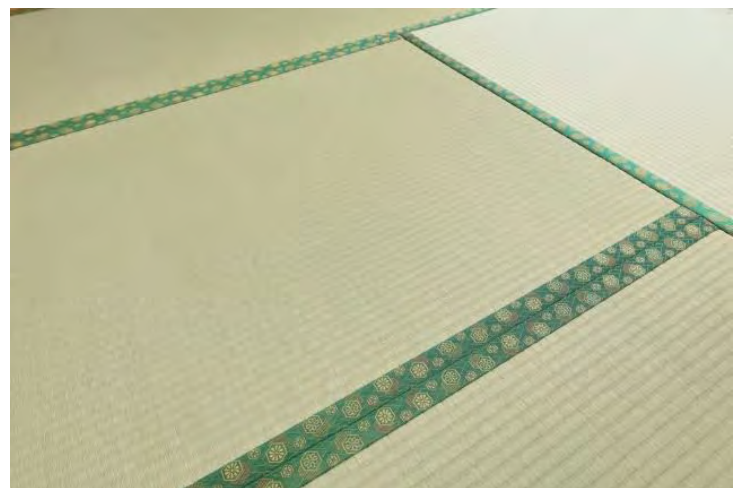
鎌倉時代になると、畳が家の中の床材として使われてくるようになり、床に敷き詰められるような形になりました。

部屋に敷き詰められるようになった畳によって、室町時代あたりから正座という座り方がされるようになりました。

畳が町人に普及したのは江戸時代中頃を過ぎたあたりで、農村では明治時代に入ってから普及していきました。

畳はフローリングと比べても柔らかく弾力があって、座るための家具がなくとも快適に過ごすことができます。

畳には、い草の独特な香りがします。い草の香りは鎮静効果があるとされ、人々の心に癒しを与えます。



・縁側

サザエさんの家の象徴と言ってよいほど、よく出てくる場所は、「縁側」です。

縁側とは、和室から張り出した板張りの部分のことです。

縁側は部屋と部屋をつなぐ他に、家の中と外の境界になります。一年を通して自然を感じられる場所です。

縁側にも種類があり、「濡れ縁」と「くれ縁」の2つあります。

濡れ縁とは、縁側が建物の外側に設置されているもののことを言い、雨によって濡れてしまうことから「濡れ縁」と呼ばれます。

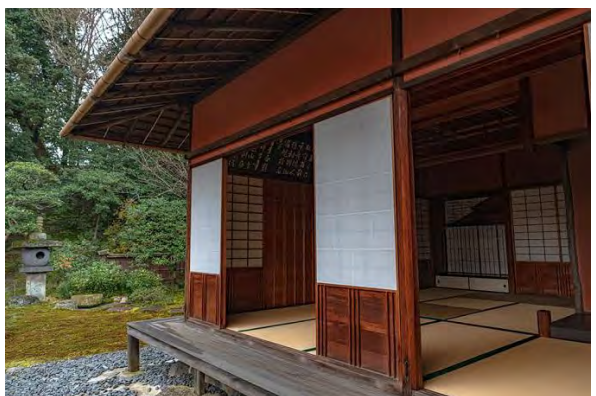
くれ縁というのは、雨戸などの内側に設置されているもののことで、外側にある扉を開け閉めしたりして、外とのつながり方を調整できます。サザエさんの家の縁側は、このくれ縁です。

縁側は、外と部屋の間に空間をつくることで夏の強い日差しを遠ざけて、冬には縁側が冷気を遮断するワンクッションとなり、冬の太陽を居間の中まで取り入れる利点があります。

現存する最古の縁側は、奈良県にある法隆寺東院の伝法堂という建物にあるものとされています。

縁側の起源は、平安時代に母屋の周囲に作られるようになったひさしの間が起源と言われています。

縁側は、住民同士の社交の場でもあります。大正時代になってから、庭に面した部屋に縁側が作られるようになり、縁側に座りながらやりとりをする、というシーンがよく見られたそうです。また、秋には干し柿や干し芋を吊るしたりして、近所の子供たちが集まってそれを食べたりしていました。庭から気軽に出入りできる縁側は、簡単に集まることのできる場所でもありました。



・床の間

磯野家には、波平とフネの部屋に床の間というスペースがあります。

床の間というのは、和室の一角につくられる、畳の床より一段高い場所のことで、掛け軸や活けた花などが飾られることが多いです。

「床」というのは、座る場所や寝る場所のことで、殿様などの身分が高い人が座る場所を一段高いところにしていたのが始まりと言われていますが、仏壇などの形式が変化してできていたものという説もあります。

床の間は客をもてなす最上の部屋にあり、床の間を背にする人が最も身分の高い人と言われています。江戸時代のころに、自分より身分の高い客を迎え入れるため、庶民の家にも床の間が作られるようになってきました。

その最上の部屋で暮らす波平は、磯野家の権威であることがわかります。

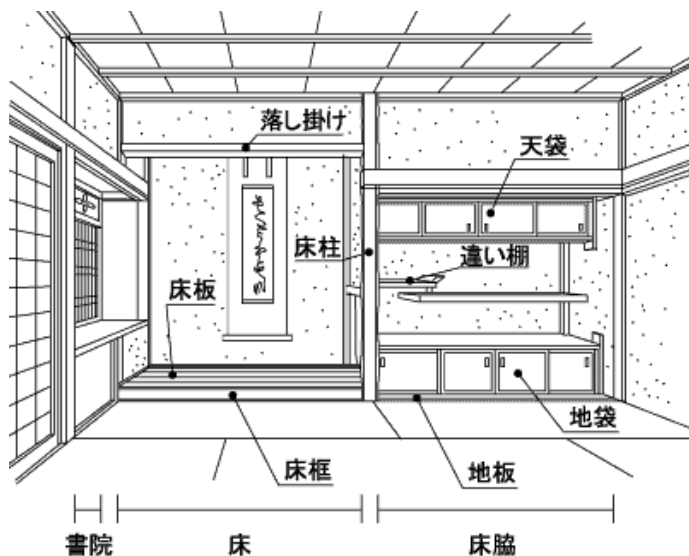
床の間に装飾を施すことで、自分の権威を演出していたそうです。

時代が進むと床の間の目的は変わり、掛け軸や活けた花が飾られるおもてなしのための部屋という認識になっていきました。

床の間にも、「本床」、「蹴込み床」、「踏込み床」、「織部床」、「置き床」などのいろいろな種類があります。

サザエさんの家にある床の間は、最も一般的な「本床」という種類のものです。

本床というのは、床板(とこいた)に床框(とこがまち)を施し、畳より一段高くしたスタイルの床の間のことです。



今の家との違い

スタイルの違い

昔ながらの日本家屋は、和を基調としたデザインです。
現代に建てられる家の多くが洋風のデザインです。



・ 建材の違い

日本家屋で使われている建材は、木材や漆喰、珪藻土などの自然素材が多いです。

今の家に使われているのは、ビニールクロスや合板フローリングなどの、化学物質を含んだ素材です。



・通気性の違い

日本は高温多湿な気候が特徴です。そのため、夏の暑さ対策や湿気を逃すためにも通気性の良さを重要視してきました。例えば床を少し高くして、湿気を逃したりなどしていました。通気性の良さゆえに冬は寒く過ごしにくいというデメリットもあります。

今の住宅は、高気密高断熱というつくりになっていきます。それにより、四季を通しての寒暖の差が少なくなりました。気密性の良さから通気性が少し悪くなってしまい湿気の害を受けやすくなったというデメリットがあります。



・人と人の距離感の違い

昔の家は、「田の字型」という間取りであったり、縁側などの外部とコミュニケーションが取れるスペースがあったりなど、人と人が繋がるということに重点を置いていると感じます。

今の家は外部からの視線を対策したり、一つ一つの部屋を仕切って家族間でもプライバシーを守ることが重視されたつくりであることが多いと感じます。



・文化や風習の違い

昔は広い平屋建ての家も多く、近所付き合いも盛んだったため、自宅で婚儀や葬儀を、いろいろな人たちを集めて行っていました。だからこそ、取り外しが簡単なふすまなどを使い、田の字型のような可変性のある間取りが必要とされていました。

ですが今では、冠婚葬祭などの多くの人が集まる行事などを自宅で行うことはあまりありません。また、一世帯あたりの人数も昔と比べて減ってしまいました。そのため部屋を仕切るものはふすまや障子からドアへと変化していきました。



・建て方の違い

昔は家を建てる職人の方々に依頼をし、建物を建てていましたが、今はハウスメーカーなどに依頼をして家を建てるようになりました。

その背景には、コストの問題があるようです。

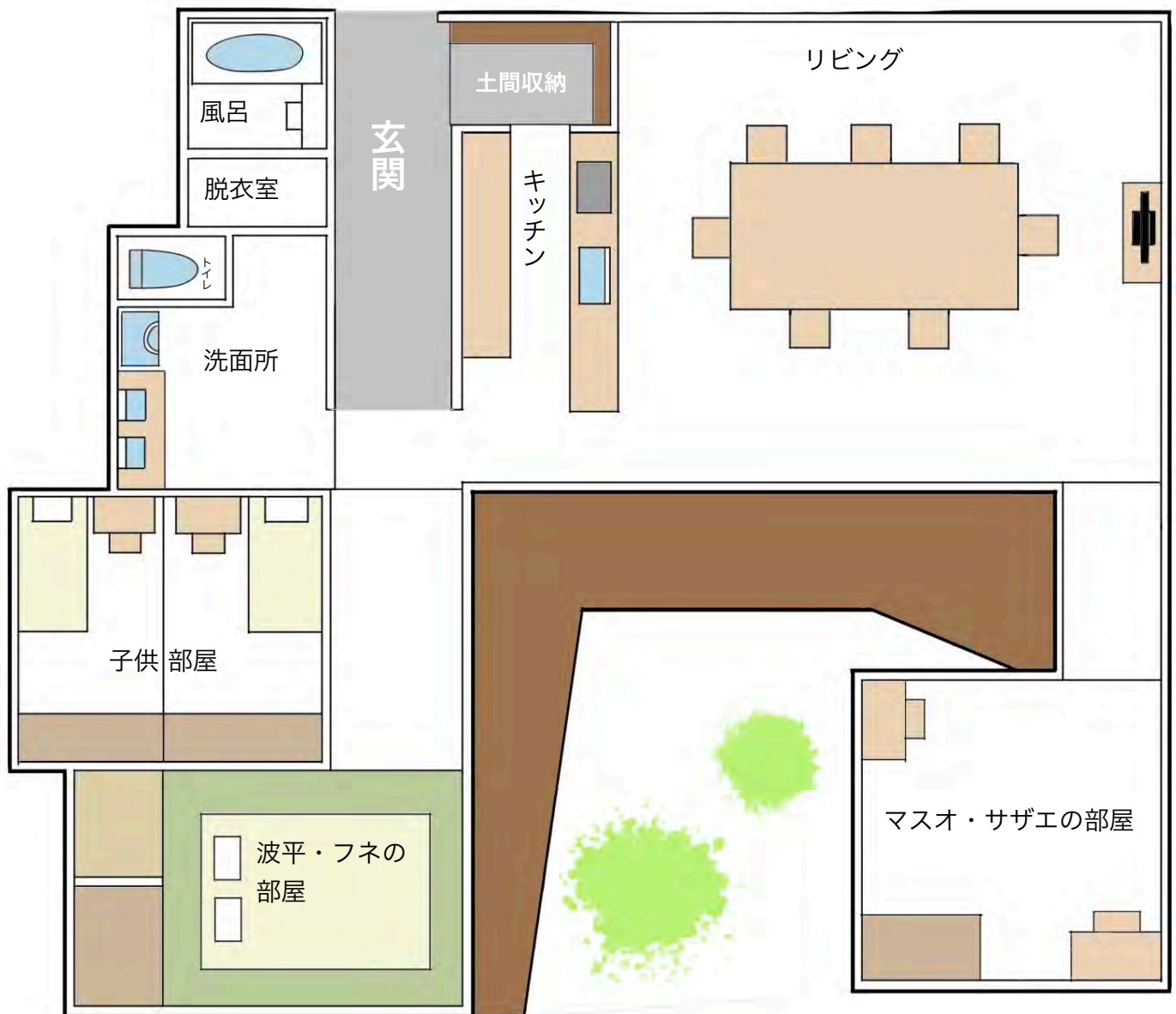
今は昔と違って値段と安さとスピードが重視されていて、コストや時間のかかってしまう日本家屋はだんだんと求められなくなっていました。



新しいサザエさんの家

昔の住まいと今の家の違いを見てみると、今と昔のすまいへの考え方の違いが見えてきます。

そこで、日本家屋と今の家、両方の特徴を取り入れたサザエさんの家を考えてみました。

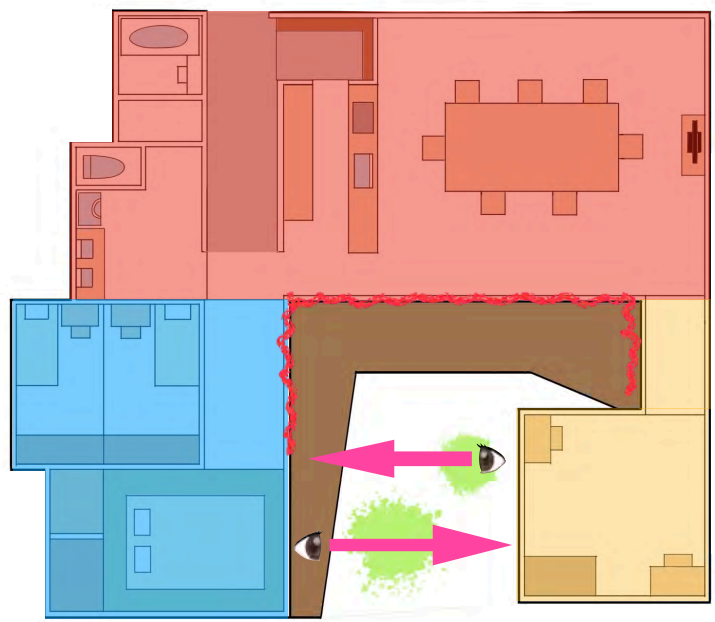


こちらが、私が考えたサザエさん家の間取りです。

今回は、家の中の「距離感」に着目しました。日本家屋の特徴である近い距離感と、今の家のプライバシー重視の距離感のどちらも取り入れ、「ちょうどいい距離感」の家になるように考えました。

この間取りは、部分共有型の二世帯住宅となっています。赤色の部分は両世帯が共有する部分、青色の部分は親世帯(波平、フネ、カツオ、ワカメ)専用の部分、黄色の部分は子世帯(サザエ、マスオ、タラオ)専用の部分となっています。

しかし、ただ分けてしまうのではなく、各世帯の専用部分にいても、近くにいることを感じられるよう、コの字型の間取りにし、親世帯の部屋からは子世帯の部屋、子世帯の部屋からは親世帯の部屋が見えるような配置しました。



また、茶の間を真ん中に配置し、家から帰って来たら必ず茶の間を通して顔を合わせられるようにし、家族の距離が離れすぎないようにしました。

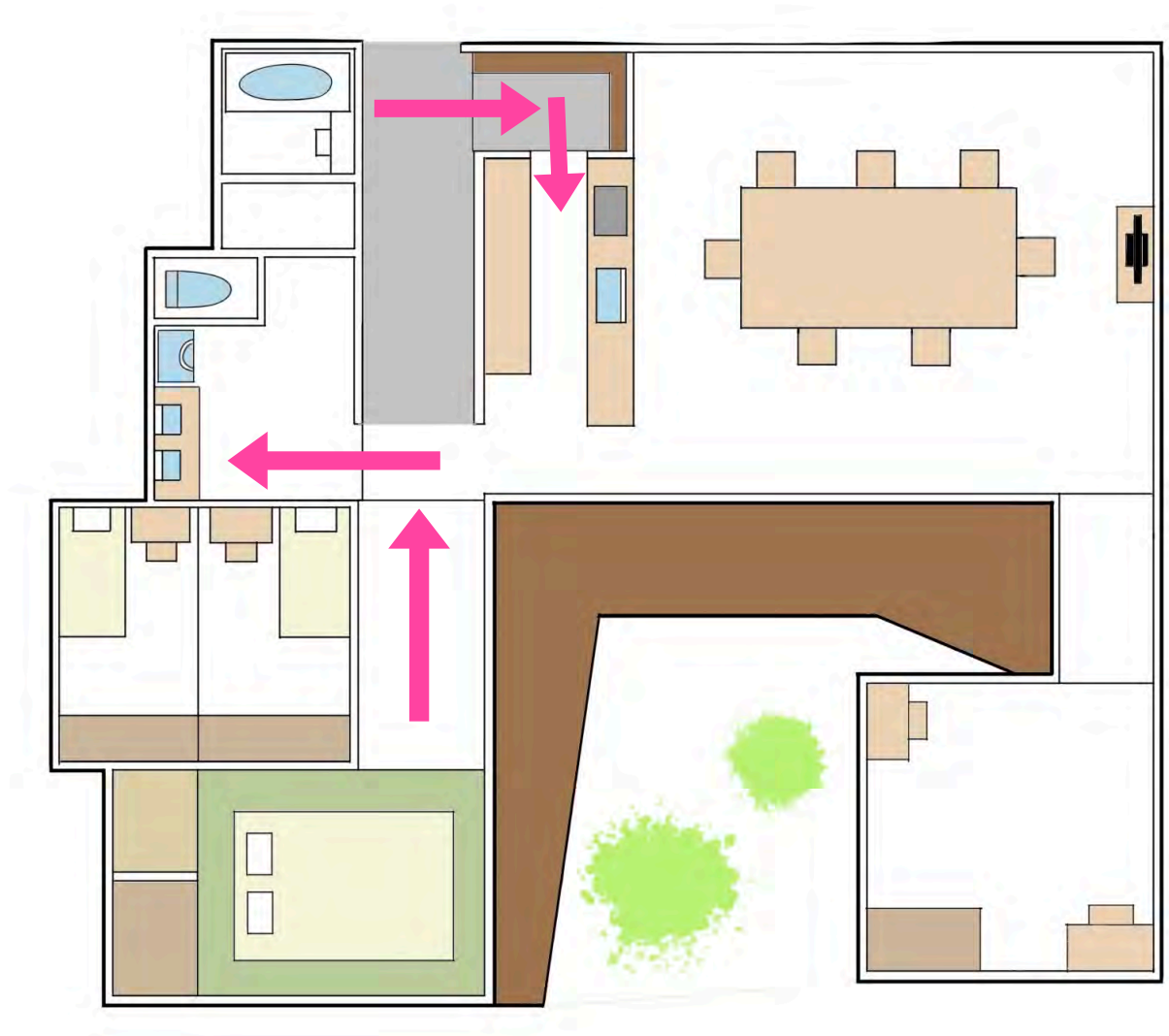
赤い波線が引いてある部分は、格子状の引き戸となっており、そこから中庭へ出ることができます。外に面する部分を格子戸にすることで、光や風を通しつつも、外部からの視線を遮るという狙いです。



↑ 格子戸のイメージ

この家の間取りは従来のサザエさんの家の間取りと同じく平屋建てです。世帯ごとに空間を分けるということで、二階建ての間取りにしようかとも考えましたが、今回の目標は「ちょうどいい距離」なので、二階建てで階ごとに世帯を分けるというより、平屋でスペースを分けるという方がちょうどいい距離に近づくと思い、平屋にしました。

この間取りは、家族との距離感だけでなく、利便性も意識しました。玄関の横に土間収納を設け、そこからキッチンに直行できるようにしました。こうすることで、例えば買い物などで食料品を買ってきたとき、すぐにキッチンに置けるため、負担が少なくなります。トイレや浴槽などの位置は、親世帯の近くにしました。これは、もし将来、波平やフネの介護をしなければいけない場合の負担を少なくするためです。



まとめ

今回このテーマで調べてみて、日本家屋という建物は、ただの古くて和風の建物、というわけではなく、日本の環境や人々の住みやすさを、しっかり考えられて作られているものだとわかりました。

今の家とは形が大きく違い、住まいというものは時代の変化や人々の考え方の変化によって大きく形が変わっていくということもわかりました。

日本家屋や今の家の特徴を調べたり、自分で間取りを考えてみたりして、建築物に施されている工夫を知り、建築の奥深さを学びました。

